

ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.14

発行日 ● 平成22年(2010)9月1日

もくじ

- ごあいさつ……………1
- 白樺同人と学習院……………2-3
- 《特別企画》辻邦生・北杜夫 もうひとつの友情物語……………3
- Information……………4
- ・史料館講座特別企画「古典の日推進フォーラム2010 in 東京」
 - ・平成22年度常設展「学習院と文学—雑誌『白樺』の生まれたところ—」

学習院と文学

—雑誌『白樺』の生まれたところ—

2010年10月1日(金)～12月11日(土)
北2号館1階 史料館展示室 入場無料
平日…12:00～17:00 土曜日…10:00～17:00
閉館日…日・祝日、10/29(金)、10/30(土)
※詳しくは4ページをご覧ください。

1. ごあいさつ

学習院の同窓生有志による文芸雑誌『白樺』の創刊(1910年4月)から丸1世紀、学習院大学史料館では、これを記念して「学習院と文学」をテーマに展覧会を開催いたします。企画を進める途上で、同窓会を通じてこのテーマに関する情報の提供を呼びかけてはどうかという助言をいただき、チラシを配布してみました。すると予測を上回る大きな反響があり、たしかに学習院は「『白樺』の生まれたところ」なのだ、改めて実感した次第です。

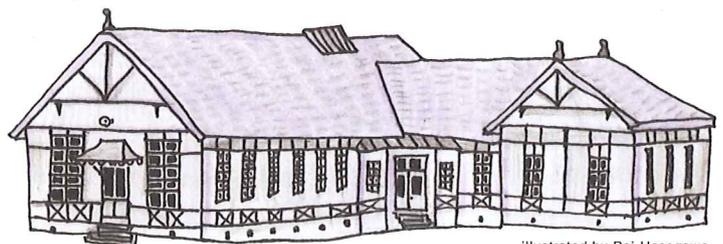
『白樺』が大正期の文壇に新風を吹き込んだことはいまでもありませんが、同誌はまた、西洋美術を意欲的に紹介し、当時の画壇を刺激したばかりか、一般の人々の美術への関心にも大きな影響を与えました。「本物」に接することがままならない時代に、主に出版物を通じて西洋美術の理解に努め、その成果を執筆や展覧会開催で多くの人と共有しようとした『白樺』同人たちの志は、西洋美術史を専門とする私が特に共感を覚える点です。

ところで、なぜ雑誌の名前を「白樺」としたのか、この機会に調べてみたところ、名前を決めあげた結果、「色をとりあはせて見てとうとう出来た名が、白樺だった。白樺の名を得た時、皆は白樺と云ふ樹を愛してゐたのであつた。しかし考へだす時は、色の方から考へた」と武者小路実篤が書いていました(『白樺』1917年12月号)。意表を突く命名法ですが、日本では高原、つまり都会からみた「避暑地」を連想させる樹である白樺は、いかにも当時の学習院出身者のイメージにふさわしく、卓抜なネーミングだったといえそうです。

この展覧会では、白樺派以外にも学習院ゆかりの文学者を取り上げました。その中で、辻邦生は私の大学院時代の恩師の夫君として面識もあり、懐かしく思い出される存在です。長年学習院大学フランス文学科教授を務めながら、質量共に並外れた作品を著し得たことは、「たえず書く人」(佐保子夫人の言)であったにしても、私にはやはり奇跡のように思われます。

末筆ながら、本展開催にあたり御助言や御協力を賜りました皆様方に、厚く御礼申し上げます。

(館長 高橋裕子)



illustrated by Rei Hasegawa

現史料館(かつて三島由紀夫が『チボ一家の人々』を借りて読んだ図書館)



高等学科卒業前の記念写真・明治39年(1906)5月
前列左から2人目より志賀直哉、細川護立、木下利玄。前列右端が武者小路実篤



神田錦町校舎



明治34年(1901)春季競漕会優勝チーム 前列中央が志賀直哉

2. 白樺同人と学習院

神田錦町・虎ノ門・四谷校舎

ここに一枚の写真がある。
写っているのは志賀直哉、武者小路実篤、木下利玄たち。
背景は学習院の四谷校舎である。
雑誌『白樺』同人の有島武郎、有島生馬、志賀直哉、武者小路実篤、正親町公和、木下利玄、里見弴、児島喜久雄、柳宗悦、郡虎彦……、彼らはこのキャンパスで出会い、共に学生生活を送った。

学習院は明治10年(1877)10月神田錦町で開業し、現在の豊島区目白にキャンパスを構えるまで3度の移転を経験している。一度目は明治21年(1888)9月、神田錦町から虎ノ門の工部大学校跡への移転である。これは神田錦町の校舎が火事で焼失したことによるもので、虎ノ門での2年間の仮住まいを経て、明治23年(1890)9月には四谷尾張町へ移った。ところが、明治27年(1894)6月に発生した地震により四谷校舎の多くが使用できなくなったため、同41年(1908)8月に学習院は初等学科を除いて目白の地へ3度目の移転をおこなう。

白樺同人のうち、神田錦町と虎ノ門の校舎で学んだのは有島武郎ただひとりである。明治20年(1887)9月に9歳で学習院予備科第3級(のちの初等学科4年)へ編入した武郎は、横浜の実家を離れて寄宿舎に入った。武郎は14歳以下が入る幼年寄宿舎の寮生となり、この頃から読み物に親しみ、『少国民』や『少年文学』などの少年雑誌も愛読したという。有島家は明治27年(1894)には一家で東京へ転居するため、有島兄弟のうち学習院で寄宿舎生活を送ったのは武郎だけ

であった。当時のことを弟の有島生馬(本名壬生馬)は次のように回想している。

「毎土曜の午後、兄は寄宿から帰つて一泊した。(中略)日曜日には兄一人さきに夕食をすませ、人力で駅へ送られていつた。われわれはそれを門まで見送り、もぎとられたように寂しかった。兄はしかし一度でも嫌な顔をみせなかつた。」(有島生馬『思い出の我』、中央公論美術出版、1976年9月)

スポーツマン志賀直哉

武郎をはじめとした白樺同人たちが在籍した四谷時代の学習院では、輔仁会活動が活発におこなわれていた。輔仁会というのは学習院の学生・教職員の校友組織で、当時は陸上部、水上部、編纂部、邦語(弁論)部等があった。水上部には学内選抜の漕艇チームが編成され、年2回の大会で各チームが優勝旗を争った。



四谷校舎・明治23年(1890)頃



四谷幼年寄宿舎

(写真:学校法人 学習院蔵)

武者小路実篤とともに輔仁会邦語部の委員を務めた志賀直哉は、文芸活動のみならずラクロスや競漕(ボート競技)、陸上競技にも熱中しており、明治34年(1901)の春季競漕会では優勝している。そんな志賀のことを後年里見弴はこのように評している。

「少年から青年にかけての志賀は大した運動家だつたよ。(中略)鉄棒も、大車輪をやつて、宙返りでおりたりしてね。ゴム球のテニスや、足袋はだしのベースボールもやつてたし、ボートはC組の本チャンだつた。『本チャン』てのは、正式のチャンピオンのことで、その次のはセコチャンだ。」(里見弴『万能選手志賀直哉』、『海』1980年1月号収載)

明治34年春季競漕会優勝チームの記念写真には、中央で誇らしげに座っている18歳の志賀が写っている。2度目の落第で武者小路や木下と同級生になる前年のことである。

同人たちの友情を育んだ学び舎

武者小路実篤は『白樺』創刊号の巻頭辞で「白樺は自分達の小さな力で作った小さな畑である。自分たちはこゝに互の許せる範囲で自分勝手なものを植ゑたいとおもつてゐる。さうして出来るだけこの畑をうまく利用しやうと思つてゐる」と書いている。つまり『白樺』は主義主張ではなく、ただ文学を志す者が各々自分の作品を発表する場として作られたものであり、彼らを結びつけたものこそが学習院で共に過ごした時間であった。有島武郎が「白樺ほど大事なものは無い」と日記に残し、里見弴が後年「学習院卒の連中で和気あいあいたる仲間」(『日本経済新聞』1956年3月連載「私の履歴書」)と記しているように、利害関係のない若き学生

「学習院と文学 —雑誌『白樺』の生まれたところ—」

《特別企画》辻邦生・北杜夫 もうひとつの友情物語

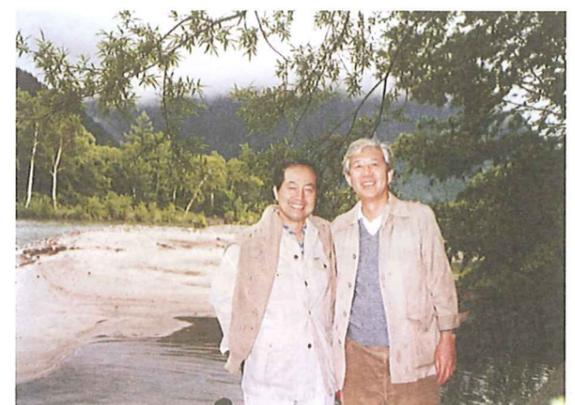
平成22年度学習院大学史料館常設展「学習院と文学—雑誌『白樺』の生まれたところ—」では、特別企画展示「辻邦生・北杜夫 もうひとつの友情物語」をあわせて開催します。

舞台は長野県の旧制松本高等学校(現信州大学)。留年して学生寮に残っていた辻邦生は、一人の風変わりな新入生と出会います。若き日の斎藤宗吉、後の北杜夫です。辻の留年や、空襲による北の一足早い入寮がなければ恐らくすれ違っていたであろう二人は、自分の中に目覚めつつあった文学への萌芽を育て合い、その友情は生涯変わることがありませんでした。

今年7月、二人の友情の証ともいべき復讐書簡集『若き日の友情—辻邦生・北杜夫往復書簡』が新潮社から刊行されました。ここには、ともに青春時代を過ごした二人が互いの存在を必要とし、支えあう姿があります。

「どんな幸運が私に与えられたか知らないが、少なくとも北杜夫と青春に出会ったことだけは、私の生れ星が幸運を指していることの証拠だといまも頑なに信じている」と辻が語る二人の友情を、自筆書簡を通して紹介します。

(展覧会の詳細は、4ページをご覧ください)



左:辻邦生 右:北杜夫(1983年)

(撮影:小島千加子)

時代に出会った仲間だったからこそ、彼らは深い親交と仲たがいを繰り返しながらも互いになくはならない存在であり続けたのだろう。

小説『友情』を書き、色紙に「仲良きことは美しき哉」と讀を残した武者小路実篤。志賀直哉をはじめとする白樺同人との交流を考えると、そこには実に深い思いがあったことに気付かされるのである。

(学芸員 生田享子)

～古典に触れ、古典に親しもう！
いにしえからの叡智を今に、そして次の世代へ～

学習院大学史料館講座特別企画
「古典の日推進フォーラム 2010 in 東京」

主催：古典の日推進委員会
共催：学習院大学史料館
後援：読売新聞社 NHK

- 日時 2010年11月27日(土) 14:00～16:40
- 会場 学習院創立百周年記念会館正堂

プログラム(予定)

- 筑前琵琶演奏……田中旭泉・酒井むい
- 基調講演……千 玄室(茶道裏千家15代家元)
瀬戸内寂聴(作家)
- パネル・セッション
芳賀 徹(東京大学名誉教授)
永井 和子(学習院女子大学長)
児玉 清(俳優)
池坊 美佳(華道家)

※敬称略、順不同

- ◇入場無料
- ◇募集定員700名 ※応募多数の場合は抽選
- ◇事前申込み制

- 応募方法
往復はがきに必要な事項を記入の上、下記に送付

- 必要事項
①お名前(ふりがな)
②郵便番号
③ご住所
④電話番号
⑤メールアドレス(お持ちの方)

※1通につき2名まで。2名分の①～⑤を明記。
返信面にも代表者のご住所・お名前を記入のこと。

- 応募締切 10月22日(金) ※当日消印有効
- 送付先
〒604-0862 京都市中京区烏丸通夷川上る
京都商工会議所ビル5階
古典の日推進委員会「フォーラム2010東京」係
- 問い合わせ
古典の日推進委員会 TEL.075-212-4767
(月～金 9:00～17:30)
ホームページ <http://www.kotennohi.jp/>

※ホームページに詳しい募集案内を掲載しております。どうぞご覧ください。



平成22年度 学習院大学史料館常設展

学習院と文学

—雑誌『白樺』の生まれたところ—

平成22年(2010)は、学習院にとって2つの節目を迎える年となりました。

今から100年前の明治43年(1910)、雑誌『白樺』が創刊されました。有島武郎・生馬・里見弴兄弟、志賀直哉、武者小路実篤、柳宗悦など、白樺同人のほとんどは学習院出身者であり、同窓・同級・血縁の絆で結ばれた同人誌から、これだけの作家や芸術家が輩出されたのは非常に珍しいことです。

もう一つ、今年には三島由紀夫の生誕85年、没後40年でもあります。初等科入学から高等科卒業までの13年間を学習院で過ごした平岡公威は、恩師清水文雄と出会い、先輩の東文彦、徳川義恭と交流を深めることで、「三島由紀夫」となりました。

白樺同人が友情を深め、三島由紀夫が学生生活を送った学習院とはどのようなところだったのでしょうか。2つの節目を機会に、学習院と文学について見つめ直します。

- ◆会期 平成22年(2010)10月1日(金)～12月11日(土)
平日…12:00～17:00 土曜日…10:00～17:00
※日曜日、祝日、10/29(金)、10/30(土)は閉館

- ◆会場 学習院大学史料館展示室(北2号館1階)
東京都豊島区目白1-5-1
JR山手線目白駅下車 徒歩3分

- ◆入場無料
- ◆ギャラリートーク
10月23日(土)・11月13日(土) 13:00～14:00

※事前の申込は不要です
※史料館展示室入口にお集まり下さい

- ◆協力 学習院同窓会 桜友会

ミュージアム・レター第14号

2010年9月1日発行

〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(3986)0221

内線 6569

FAX 03(5992)9219

Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

- ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>